第17回　教行信証に学ぶ会 講師:延塚知道先生

2022（令和4）年8月18日　会場 円徳寺

講題 :「『教行信証』　源信・源空の残した課題　」

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

　こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。
　自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。
　自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。
　自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。
願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義　1

　どうもみなさんこんにちは。コロナがだいぶひどいようで、こういう時期にお越しいただきまして大変ありがとうございます。田畑先生はじめ、円徳寺さん大変ご苦労しながら決断なさったのだろうと思います。大変ありがたいと思います。僕は、相変わらずばたばた動いていまして、コロナもあんまり気にならなくなりました。会場の方にかえってご迷惑をおかけするので、私は最初からあまり気にしてないので、死にたくはないですけども、まあ、罹ったら大丈夫かなというくらいで、まあ腹を決めて、それよりも大事な親鸞聖人の教えを伝えたいと、こう思って回っているわけです。
　まあ、ひとつお礼をと言うか、皆さんに申し訳ないと思いますが、西藤さんがずいぶんご心配をいただいて、私の『教行信証』の本（『親鸞の主著『教行信証』の世界』東本願寺出版）を皆さんの方にお買い上げいただくという、大変申し訳ないと思います。前にも申し上げましたが、東本願寺からこれまで『教行信証』の本が出ていないのです。やはり『教行信証』は書けないのです。各巻を解説するというくらいなら、まだよいのですが、全体を見通しながら親鸞聖人の御心を訪ねるというのは、やはり相当力がいるということ、と同時に文

章に残すということは、これは１００年残りますから、ですからやはりみな躊躇して、なかなか書けないわけです。ところが、私は１５年ほど、蓮如上人のご遠忌が始まる前から、本山の部長さんたちの会議がありまして、部長職というのは大変忙しい事務方ですから、だから大変忙しいのですが、その部長さんたちの会で毎月『教行信証』を読みたいということで、京都に帰るまで読んできたわけです。読むと雑談をしますし、年に２～３回、そして最後には盛大に大変立派な料亭で送別会をしてくださって、そんなこともあって、部長さんたちの本音を聞くと、学者は偉そうにしているけど、『教行信証』も書けないのかと。本山から『教行信証』は今まで出てないではないかということを言われまして、まあ確かにそうだと思って、これは責任を果たさないといけないと思って、『教行信証』を本山から出させていただきました。ところがふが悪い（運が悪い）ことに、出したとたんにコロナ禍になってしまいまして、本山は閉鎖状態ですし、あちこちで研修会をするときに必ず本山の本を売るのですが、それができなくなって、まあ内情を言いますと、いっぺんに１０００冊は出たのですが、あとはぽつぽつと地方から買ってくださる方で、今半分ぐらい売れてますということでした。

もうひとつは、『教行信証』が書けなかったというのと同時に、もうひとつは来年御遠忌（宗祖親鸞聖人御誕生８５０年、立教開宗８００年慶讃法要）ですね。そのために、「親鸞聖人の三部経観」、一番大事ですよね、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』はね。しかもその三部経を三つ並べて、どれが優れているというような読み方ではなくて、ご自身が立った『大経』に立って『観経』がどういうはたらきをしてくださったのか、『阿弥陀経』がどういう役目をはたしてくださったのか、そういう親鸞の三部経観、これが無いのだと言うので、私は「わかりました」と言って、この間、安居を『大経』で講義しましたので、あの『大経』に『観経』の部分と、それから特に『阿弥陀経』の部分を書き足して、今度出すことになったわけです。おそらく報恩講で私が「祖徳讃嘆」と言って１１月２８日の日に親鸞聖人の讃嘆をする、法話をすることになっておりますから、それまでに出しましょうと、こう言って今渡しているのですが、『教行信証』をせっかく書いて、今度三部経を出すというときに、あまり売れてなかったら、ちょっと元気が出ないねという話になって（笑）、それをちょっと西藤さんに、僕はお願いする気はなかったのですが、西藤さんにちょっとお話をしたら、西藤さんはさすがに販売のプロですから（笑）、「わかりました。私ができることはやりましょう」と言ってくださって、皆さんにご迷惑をおかけすることになったわけです。まあしかし、それにしても『教行信証』と三部経を本山から出せば、私も死んでもいいかなというふうに思うておりますので、そういう意味でみなさん大変ありがたかったと思っております。１０冊２０冊お買い上げくださった方もいらっしゃると聞いておりまして、まあ、最初にお礼を申し上げます。どうも本当にありがとうございました。

ところで、皆さんと拝読しております『教行信証』、七祖をずいぶん長いこと時間をかけました。それは真宗という仏教、親鸞聖人の仏教を学ぶときに、やっぱりどうしても大切なのが七祖です。ですから龍樹から何をいただいたか、もう簡単です。龍樹は菩薩ですから、普通だったら菩薩道のはずです。ところが龍樹は菩薩であったにもかかわらず、「修行ではなくて信心なのだ」と初めて言ってくださった方です。信心だから凡夫でも他力の信心がおこれば覚りをいただくのだと、こういうことをあの時代に初めて言ってくださった方が龍樹

菩薩でしたね。その信心は浄土を信じる、浄土のはたらき、覚りといっても龍樹菩薩は「空」（くう）と、こうおっしゃるのですが、覚りといっても、どう言ったらいいだろうか、人間は百八の煩悩があるといわれますね。そうすると本当に空、覚りというものがあるとすると、その百八の煩悩を一つ一つ消滅してくださるはたらきがある。それを浄土教では「浄土」と言って、そして、百八は大変だから四十八の本願で四十八のはたらきによって、私たち凡夫を浄土に招き入れてくださる。こういうふうに龍樹を引き継いで、浄土の教えとして展開してくださった方が世親（天親）菩薩。そしてそれを註釈してくださって、凡夫の仏道に展開してくださった。それが曇鸞大師でした。

ですから龍樹、天親、曇鸞、ここまでが『大経』の仏教者。ですから、どこまでも親鸞聖人の仏教は『大経』から始まっていると思ってください。ですから親鸞聖人は『大経』に立って『教行信証』を書いたわけです。それは新しく展開したのではなくて、もとに帰った。仏教の歴史のもとに帰った。お釈迦さんのところにまで帰って、『大経』の涅槃の覚り、これを凡夫でも信心によっていただくのだと。こういうことをはっきりさせてくださったのが親鸞聖人ですね。

ところが曇鸞以降、道綽、善導、源空（法然）、こういう方たちは、いわゆる世親の『浄土論』、つまり浄土の仏教、浄土教を継承していくわけです。そのために必要であった経典が『観経』ですね。ですから道綽、それから善導、法然。この方々は全部『観経』に立って、そしてお念仏によって浄土に往生していくのだと、こういう道を明らかにしてくださったわけですね。それを受けて親鸞聖人は、『大経』に立ち返って、そして浄土真宗を明らかにしてくださったのが『教行信証』です。ですから『大経』に立ち返るときに、一番大きな影響を与えた方は法然です。ですから今日、最後に法然を皆さんと一緒に勉強しますけれども、『観経』に立った法然が親鸞にどういう課題を残したのか、親鸞聖人はちゃんとそれを引用でわかるように書いてくださっていますから、そこを中心に読んでいきたいと思います。

もう一人は源信僧都です。この源信僧都という方は、相当もう時間が経っていますけども、日本の仏教界、天台宗の、今でいえば日本の東大に匹敵するような、天台宗で今まで天才が二人出ている。一人は源信です。すごい人ですね。源信という方は１５歳でもう紫の衣を着てたといいますから、１５歳ですよ、すごいものでね、１７、１８歳の時に天台宗の御遠忌が勤まった時には、トップの７人の内に入っていたというのです。紫の衣を着て、まだその時に紫の衣を着る資格はなかったそうですけども、天皇が許して、特別に許しをもらって源信は紫の衣を着て法会に出たというくらい優れた人でした。

若い源信ですから、有名なお話は皆さん知っていると思いますが、当時貴族の家で法要などを勤めると立派な絹をいただく、それを母親にお土産に持って「私はここまで、天台宗で頑張りました」と言うと、母親が「私はこんなものをもらうためにお前を育てたのではない」と。まあ立派な母親ですね。「お前を育てたのは、お前が救われるかどうか、その仏教を比叡山ではっきりしてほしかった。お前が救われたのなら、この私を救ってくれ」と言って源信に泣きついたそうですね。ですから源信は早くから、もう出家の道はあきらめて、１９歳か２０歳くらいで隠遁して、そして横川（よかわ）に住んで浄土教を広めた仏教者でした。ですから大変求道的な仏教者で、天台宗の教学では満足できなかった方、そして一代仏教を勉

強した方。ですから源信の『往生要集』は大変難しいのです。

この間、西藤さんの起こしてくださったものを拝読しておりまして、最後に岡田先生が大変立派なことをおっしゃってくださっていて、岡田先生は源信が好きで『往生要集』を読んでいるのだと。ところが『往生要集』は難しいと。けどもあれは序文から読むべきだと私は思うということを仰ってくださってました。その通りでね、法然が２５歳の時に、当時の天台座主とけんかになるのですね、『往生要集』をめぐって。その時に、天台座主というのはわかりますね、天台宗を背負っているわけですから、だから『往生要集』の念仏というのは、仏を観る「念仏三昧」、「観仏三昧」、そういう念仏を源信は明らかにしてくれているのだと、これは代々の座主が受け継いできていることで。お前のような小者が「称名念仏」なんてバカなことを言うなと言ってけんかになるわけです。その時に法然は「いや、そうではない」と、「まず序文を読んでごらんなさい」と言うのです。序文をみなさんご存じですか。いい言葉ですから書いておきましょうね。

「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、たれか帰せざるものあらん。ただし顕密の教法、その文、一にあらず。事理の業因、その行これ多し。利智精進の人は、いまだ難しとなさず。予がごとき頑魯（がんろ）**のもの、あにあへてせんや。**」（『往生要集』：「真宗聖教全書一　三経七祖部」７２９頁、西「浄土真宗聖典七祖篇」７９７頁）

「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり」。このあと少し、天台宗あるいは真言宗という、こういう教義があるということが書かれていますが、そこは省きますね。天台宗それから真言宗等の教義はあるのだけれども、その教義は「利智精進の人」、わかりますね。利智に優れて、そして修行に努力できる人。そういう人ならば「いまだ難しとなさず」。そういう人ならば天台宗の観仏、そういう修業はできるであろうと。しかし「予がごとき頑魯のもの」、わたしのような頑固で愚かなもの、「あにあへてせんや」と。これが『往生要集』の序文の書き出しの文章です。なかなかいい文章でしょう。

「それ往生極楽の教行は」、浄土教の教えと念仏の教えは、五濁の世、無仏の時、末代の目足、生きるときの智慧の目となり、五濁の世を生きる足となる。浄土教の念仏の教えは、濁世末代を生きていく時の智慧となり足となってくださるのだと。天台宗や真言宗では仏を観るという方法があるけれども、そういう方法は「利智精進の人」、頭がよく智慧が優れて努力することができる人ならば、そういう方法は「いまだ難しとなさず」と、こう言うのですから、それはできるであろうと。しかし、私のような頑固で愚かな者はどうしてそういう修行ができるであろうか。称名念仏一つ、これで十分なのだと。

こういうことから『往生要集』が始まるわけです。すばらしいでしょう。こういうのはいいね。自分の立脚地、自分の責任、それを絶対に逃げないね。まあわかりますね、しょうもないこと言わんでも。「統一教会に行ったのは、あれは秘書の責任だ」というようなこと言って。そういうのとは全然違いますでしょう。「わたくしのような頑固で愚かな者は、どうしてそういう修行ができるであろうか、称名念仏ひとつで十分なのだ」と。ここから始まりますから、法然はこの源信の『往生要集』の序文と、それから、今日皆さんと拝読する親鸞聖人が抑えている文章。これによって、源信はこういう自覚を持った方として尊敬するわけです。

そして、今日は行の巻ですから、そこまで申し上げませんが、信の巻に入った時にもう一度源信に目を向けたいと今思っています。それは「三一問答」（東聖典２２３頁～２３６頁、西２２９～２４５、島１２－６６～１２－７８）という問答がありますが、これは親鸞聖人の『教行信証』の一つの山です。つまり己証（こしょう）。己証ってわかりますか、親鸞聖人の、親鸞聖人独特の証明をするところ。信心に涅槃の覚りがいただけるのだということを証明するのが三一問答ですが、その三一問答ともう一つ化身土の巻に、皆さんご存知のように「三経一異の問答」（東聖典３３１頁～３３３頁、西３８１～３８３、島１２－１６４～１２－１６６）というのがあります。それが私が先に申し上げた、親鸞聖人は『大経』、『観経』、『阿弥陀経』を並べて、どれが優れているか劣っているかということを言ったのではなくて、自分を救った『大経』、そこに立って、『観経』がどういう役目を果たしてくださったか、『阿弥陀経』がどういう役目を果たしてくださったか、自分の救われた身に立って、その責任の中で明らかにしてくださった三部経観。それが明らかにされているところが三経一異の問答と言われるところなのです。

ところがその二つの問答の前に、どちらも源信の『往生要集』の文章があります。なぜか、これは重要な問題なのですが、そんなことをこれまであまり考えてきていないために、参考書にはどれも書いていませんが、実は親鸞聖人の『教行信証』は最終的には「三三の法門」ということでまとめられていきます。一回言いました。難しい顔しとるけど、いい、思い出すと思う。

第十八願、『大経』、正定聚の機、難思議往生。これが『大経』ですね。『大経』は第十八願の世界を表すのですよ。そして邪定聚、不定聚に対して正定聚を表すのですよ。往生は難思議往生ですよ。これが『大経』。ちゃんと覚えなさいよ、試験に出すよ（笑）。

第十九願、これは『観経』、そして邪定聚の機、往生は双樹林下往生。覚えなくてもいいわ、何回か聞いてるうちに頭に残っていくから。

最後に第二十願、『阿弥陀経』、不定聚の機、難思往生。

こういうふうに『大経』、『観経』、『阿弥陀経』を中心にして、『大経』によって救われていく機は正定聚。そして往生は難思議往生。そしてそこに開かれてくる世界こそ第十八願の世界である。こういうふうに経典と本願文と機と往生とをきちっと表にして昔は覚えたものです。なんでかというと試験に出るからです（笑）。いいですか、だから皆さんもそれを表にして覚えるといい。

三　願	三　経	三　門	三　藏	三　機	三往生
第十八願	仏説無量寿経	弘願	福智蔵	正定聚	難思議往生
第十九願	仏説観無量寿経	要門	福徳蔵	邪定聚	双樹林下往生
第二十願	仏説阿弥陀経	真門	功徳蔵	不定聚	難思往生

今度お買い上げいただいた本にはちゃんとそういうことが書かれている。それを縮めて三三の法門と言います。三つの経典とそれから三つの本願と三つの正定聚、邪定聚、不定聚ということと、三つの往生、それを全部合わせて三三の法門というふうにこれまで言ってきま

した。これが『教行信証』の最終的な結論です。この最終的な結論に導くためには、どうしても源信の『往生要集』の文章が必要でした。そのために三一問答と三経一異の問答の前に源信の『往生要集』の文章があるということになります。それについては信の巻に行ったときに改めてお話しましょう。

今日は行の巻だから、行の巻というのは念仏の法だから、機の方についてはそれほど言及していないと思います。そんなふうに、実は、七祖の中で一番わかりにくいのが道綽と源信なのですが、そうですね、ところが法然という人の講義を読むと、法然はいつも道綽と源信を誉めます。だから法然という人は偉い人であったのでしょうね。だから僕らは勉強してないから、一番わかりにくいのが道綽と源信だと思うのだけど、よく勉強した人は、実は道綽が大きな仕事をしている。そして源信が偉い仕事をしているとわかるのです。

一つだけ申し上げておきましょう。皆さんよくご存知のように「**煩悩、眼を障**（さ）**えて見たてまつらずといえども、大悲倦**（ものう）**きことなく、常に我を照らしたまう**」（「正信偈」東聖典２０７頁、西２０７、島１２－５３）。「摂取不捨」でもいいですよ。同じことです。そんなふうに私たちの生活感覚からすると、死ぬまで自力が抜けない者を、どうして仏様が救ってくれるのか。これが私たちの最終的な課題です。それが仏様にとっても最終的な課題でした。だから仏様の方は『阿弥陀経』を説いて、そして『大経』では自力の煩悩を二つに分けて、私がいつも言いますね、『大経』は自力を二つに分けるのだと。十九願の自力は時々反省ができる自力。「しまった、あんなことを言わなければよかった」とか、「こんなことを言わなければよかった」とか、そんなことばっかり思うでしょうが。それそれ、それはまだ十九願の自力、「あんなこと言わなければよかった」と思うとる、それも自力なんやけど（笑）、それが人間には反省できない。それを二十願の自力と言って、仏様が最終的に救わなければならないのは二十願の自力なのだと言って『阿弥陀経』を説いてくださった。

それを実は源信は、ちゃんとはやく歌にして、「煩悩、眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲倦きことなく、常に我を照らしたまう」、これですね。これはなかなか言えないですよ。これよ、私のような頑魯の者をね、本願の教えだけが救ってくださった。二十願の機、反省できない自力まで、仏様が見抜いて救ってくださったのだ。それをまず歌にして、文章にして教えてくださったのが源信なのです。

道綽、善導までは、これは専修か雑修か、行をね、言ってることわかりますか。専修、これは自力を捨てて他力の念仏に帰した、それが専修ですね。それに対して自力が混ざった行は雑修であると。こういうふうに、道綽、善導までは行の規定、行が専修か雑修か、これで収めてきました。もちろん善導大師には二種深信がありますから、あれが大切な機の自覚ですが、まあ覚えやすいように皆さんにわかるように申し上げると、道綽、善導までは行の規定でした。ところが源信になると、行を行じている自分の方に目が向いてきて、たとえ専修の念仏であったとしても、自分の方が二十願の機だから反省できない自力がある。混ざっているんだから、だからいくら行が専修であっても、本当の意味で覚りを悟ったというわけにはいかない。だから「煩悩にまなこさえられて（「高僧和讃」）、見たてまつらずといえども（「正信偈」）」これが必ず付くわけです。けれども「大悲ものうきことなくて　つねにわが身をてらすなり」（「高僧和讃」、東聖典４９８頁、西５９５、島１１－３０）。こういうこと

を文章で残してくださっている。それは念仏の、浄土教の伝統で言えば、善導までは念仏の規定であったものを源信からは念仏を行じる主体に目が向いている。そこに『大経』で言う十九願の自力か二十願の自力かということが問題になってくる。それを法然に先立って、親鸞に先立って明らかにしてくださったのが源信僧都です。だから源信という人は偉い人でしょう。そういうまなざしをもって源信をお読みいただくと大変ありがたいと思っています。言っていることはわかりますか。皆さんコロナに罹っているわけではないですね。ちょっと暑いからね、今日は。

それでは源信をざっと読みましょう。今申し上げたことで、だいたいもう源信のところで申し上げることはあまりないのです。この行の巻で言えば１８８ページ、「『往生要集』に云わく」とありますね。皆さんと一緒に読んでみましょうか。いいですか。

「『往生要集』に云わく、『双巻経』（大経）の三輩の業、浅深ありといえども、しかるに通じてみな「一向専念無量寿仏」と云えり。三つに、四十八願の中に念仏門において、別して一つの願を発して云わく、「乃至十念若不生者不取正覚」と。四つに、『観経』には、「極重の悪人、他の方便なし。ただ弥陀を称して極楽に生まるることを得」と。已上」

（東聖典１８８頁、西１８４、島１２－３５）

これだけですね。これはわかりますね。源信の『往生要集』全部を読むと、さっき言ったようにあまりにも高邁で、まるで修行の念仏を説いているのか、称名念仏を説いているのか、天台宗でも区別がつかない。だから法然と天台座主がけんかした。こういうことが起こるわけです。けれども親鸞聖人の目で見ると実に明快で、これは『大経』の仏教を明らかにしてくださった仏者である。まず、これがありますね。

ですから『大経』の三輩章、三輩章をご存知ですか、上輩、中輩、下輩。これは『観経』で言えば上品上生から下品下生まで。そこを読むとすべて「**一向専念無量寿仏**」と書かれている（東聖典４４頁～４６頁、西４１～４３、島１－３９～１－４１）。上輩の者も「一向専念無量寿仏」、中輩も「一向専念無量寿仏」、下輩も「一向専念無量寿仏」と説かれている。そして、さらに言えば、『大経』の第十八願の中の念仏門、第十八願には別願として特別の願を起こして下さっている。そこには「乃至十念しなさい」。そうですね。そして、「もし念仏をして浄土に生まれなければ私は阿弥陀にならない」と誓って下さっている。第十八願にそう誓われている。だから四十八願すべては当然のこと称名念仏を説いているに違いない。こう言っているわけです。

そして、さらに言えば、『観経』で称名念仏に救われていくのは下品下生の悪人であると、こうありましたね。ですから『観経』には、第十八願の称名念仏に救われていく者は極重の悪人であって、念仏以外の他の方便はどこにもありません。こういうことですね。ただ、ここにはっきり出てきます。「ただ弥陀を称して極楽に生まるることを得」。こういうふうに『往生要集』は称名念仏一つを説いているのだということを親鸞聖人はこの引文で明らかにしてくださっているわけですね。よくわかりますね。

中の文章はちょっと飛ばしましょう。その次の８７というところの文章、これも皆さんと一緒に読んでみますよ。

「この六種の功徳に依って、信和尚の云わく、一つには念ずべし、一称南無仏皆已成仏道

のゆえに、我無上功徳田を帰命し礼したてまつる。二つには念ずべし、慈眼をもって衆生を視そなわすこと、平等にして一子のごとし。かるがゆえに、我、極大慈悲母を帰命し礼したてまつる。三つには念ずべし、十方の諸大士、弥陀尊を恭敬したてまつるがゆえに、我、無上両足尊を帰命し礼したてまつる。四つには念ずべし、ひとたび仏名を聞くことを得ること、優曇華よりも過ぎたり。かるがゆえに我、極難値遇者を帰命し礼したてまつる。五つには念ずべし、一百倶胝界には二尊、並んで出でたまわず。かるがゆえに我、希有大法王を帰命し礼したてまつる。六つには念ずべし、仏法衆徳海は三世同じく一体なり。かるがゆえに我、円融万徳尊を帰命し礼したてまつる、と。已上」

ここは南無阿弥陀仏のはたらきを六つに分けて、そして一言で言えば他力の念仏である。こっちから努力しなくても仏様の方から救ってくださる。仏様の慈眼、智慧によって、私たちを見抜いて、そして私たちを救って下さる念仏一つを選んでくださったのだから、仏様の慈眼によって救われるのですよ。あるいは、仏様の大慈悲の悲母、父と母によって救われるのですよというふうに、今のところは他力の念仏によって救われるのですよということを明らかにしているところが今のところだと考えてください。

言葉一つひとつを説明いていくと時間がかかってしまうから、要するに仏様の方に私たちを救うはたらきがある。だから大慈眼であり、あるいは極大慈悲母であり、無上両足尊であるというふうに、阿弥陀さんをそういうふうに誉めているわけです。それはすべて阿弥陀の方の他力の念仏によって私たちは救われるのですよということを表している部分だというふうに了解してください。

そして最後、もうちょっと読んでみましょう。いいですか。

「**また云わく、波利質多樹の華、一日衣に薫ずるに、瞻蔔華・波師迦華、千歳薫ずといえども、及ぶことあたわざるところなり。已上**」。もう一つ。

「**また云わく、一斤の石汁、よく千斤の銅**（あかがね）**を変じて金**（こがね）**となす。雪山に草あり、名づけて忍辱とす。牛、もし食すればすなわち醍醐を得。尸利沙、昴星を見ればすなわち菓実を出だすがごとし。已上**」。

ここですね。ここは読んだらすぐわかりますね。波利質多樹の華に衣を一日中付けておくと、ほかの華が千年同じようにしても及ばない、それほど強いはたらきで私たちを教化してくださる。これはすぐわかりますね。本願のはたらきに遇えば、どんなものも本願のはたらきによって救われていくのですよ。これを表している。ですから、さっき言った、他力の念仏をまとめている文章と言ってもいいわけです。

そしてその次は、これも簡単です。「一斤の石汁、よく千斤の銅を変じて金となす」。わかりますね、立った一粒の本願のはたらきでも、銅を金に変換するようなものである。皆さんがよく知っている言葉だったら、「**いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら**」（『唯信鈔文意』、東聖典５５３頁、西７０８、島２０－６）、それを小金に変える。それと同じことがここに書かれています。ですからどこまでも、今日最初に申し上げたように、源信は「頑魯のもの」、これが源信の機の自覚、源信の凡夫の自覚。この「頑魯のもの」を本願によって金（こがね）のような人生に変えてくださった。まあ皆さんそうですね。私たちもそうです。一生田舎で生活して、いのち終わっていくというのは、そんなに褒められることもなければ、

そんなに脚光を浴びることもありませんね。けれどもね、そこで一生懸命生きて、そしてお念仏によって亡くなっていく、そのことがどんなにすばらしい意味を持っているか。

去年、私申し上げましたが、私の地元の二股のトンネルの事故の時に、まだ嫁さんに来て、二人子供が出来たときに事故に遭った三好のばあちゃんと言って有名な人ですが、この三好のばあちゃんが去年１０５歳で亡くなったのです。今年が初盆でした。まあねえ、どんな偉かったか。僕のところご門徒がないでしょう。だから僕が大学におるころは、草が伸び放題で、ご門徒がないからしょうがないね。そうしたら、その三好のばあちゃんが、自分の息子やら娘やら、たくさん身内がおるわけです、近くに。それに全部声をかけて、「お寺は住職のものじゃない。あっこには爆発で亡くなった人たちの慰霊塔が立っとろうが。お前たちの父ちゃんの墓と一緒や。なんで盆になったら掃除に行かんか」、と言って怒ってね、それからずっとみんなが来て、そして草を刈って掃除をしてくれるようになったのですよ。

ところが僕が帰ってくる頃になると、もうその息子がそもそも８０歳を過ぎているのです。僕が一番若手だから、これ以上させると、石垣から落ちてけがをしたら申し訳ないから、もういい、僕が帰って来たから僕がする、これは私の仕事だと言って僕がやっているのだけど、それまで、三好のばあちゃんの一言で村中の人が出てきて草を刈っていた。道路愛護の日があろう、草刈る日が、あの日にみんなで来て一緒にやる。そうしたら１０５歳で亡くなってしまいました。偉いばあちゃんでね、まあ私はもう涙が出る、ばあちゃんのことを思うとね。

報恩講に１０３歳まで来とった、歩いて。一番後ろの柱にこうして寄りかかって、「そうそうボンちゃんの言う通り」。前から言うとるように、僕は今だに「ボンちゃん」やからね（笑）。そして僕の見方やから、なんでもかんでも「そう、ボンちゃんの言う通り」と言ってくれるのです。一番最後の時でした。報恩講に来た時に「仏様のはたらきの中で私たちは生かされている。だから、いいことであろうと悪いことであろうと、人間の思いはいろいろ思うけど、その通りにならん。それは仏様の世界で生まれて仏様の世界で死んでいくのだから、だから生きている間のことも全部、本当は仏様の世界を生きとるのよ。思い通りにはならんのや」と言ったら、ばあちゃんが「そうそう、ボンちゃんの言う通り」（笑）。大きな体のばあちゃんでね、声も大きかったのよ。

その時に話ししてくれたことは僕は今だに忘れんのや。「ボンちゃんの言う通り。あの爆発が起こった時に…」と言ってしゃべり出したのよ、ばあちゃんが、大きい声で。「あの爆発の事故があった時に、主人はやっと戦争から帰って来て、これからみんなで過ごせると思って、どんなに嬉しかったか。そしたら、あの爆発に遭うて、家は壊れるは、田んぼはもう２～３メートル砂に埋まるは、父ちゃんも死んだし、爺ちゃんも死んだし、全部死んだ。結局嫁に来た自分だけが残った。それで私は死んでしまおうと何度思うたか。それも田んぼも畑もみんな砂が３メートルも積もっているのに、そんなことでは生きていけないと思って、何度死のうと思ったか。その時にこの子たちがおったのよ」と言って、二人おるんです息子が。その息子の一人が今、僕のところの責任役員をしてくれている。そうだけど、その人もう８０歳を過ぎているから、もうあまり長くないかもしれんのや。その人が手を引いていたから「乳飲み子がおって、腹がへったと泣くんよ。そやから私はもう首くくろうと何度思ったかしれんけど、首つれなかった。一生懸命にこの子たちのために生きようと思って、私は

ここで死んでもいいと思って、そのとき腹を決めた」と言ってたのですよ。
　そうしたらそれからが面白かったのです。「ボンちゃんその時にな、気が付いたらおなかに子供が出来ていた」。父ちゃん戦争から帰って来て頑張ったんやろな。気が付いたら父ちゃん死んでから子供が出来ているということがわかったと。「その頃みんな赤飯炊いてね、子供が出来たら喜んだのよ。だけど、その時だけは私はもうこの子が生まれてきたらどうしようと思うてね、どれだけもう泣いたか」と言って、その子が今そのばあちゃんをずっと世話しとった子なのです。僕よりも一歳上や。僕は昭和２３年生まれで、彼は２２年生まれやから、ちょうど２０年のあの災害の後すぐ生まれているのです。そうしたらこう言うのよ。「ボンちゃんな、仏さんの思い通りにならんというのは、いいことだけじゃないぞ。その時に私はこの子が生まれたら、もうどうにもならないから、だからこの子を産んでいる間に田んぼも畑も誰もしてくれないし重機もないし、泥はたまっているは、何もできないのだから、どうしたらいいかと思うて、まあ産む時にも悩んだ。そうしたら周りの人がみんな、自分のところの仕事が終わってからカンテラつけて８時か９時ごろになってみんな集まってくれて、私が寝ている間、子供を産んでいる間ずっと産後の肥立ちが悪かったけども、その間もずっと全部うちの田んぼと畑をちゃんとしてくれたのは周りの人なのよ。私はこれでどうなるかと思うとったけど、悪いこともいいことも仏さんの言う通りやぞ」と言われた。爆発は自分にとって都合が悪かったと。けど、みんなが来て助けてくれたのは都合がよかったと。どっちも私の思いが外れたことやったと（笑）言って、「ボンちゃんの言う通り、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言って念仏したのが最後の報恩講でした。１０３歳の時よ。
　そのばあちゃん、僕が生まれたときから、小さい時からばあちゃんに頭をなでられて育てられたんやけど、まあ人の悪口を一回も言うたことがない。うちに来てお酒飲んだりしよう、みんなで。そしたらだいたい悪口言うぞ、みんな（笑）。お寺でわあわあ言うとったら。そのばあちゃんだけは一回も悪口を言うたことがない。だから偉いばあちゃんやったんですよ。今年初盆に行ったら、家に誰もいないのです。どうなっているのかと言ったら、実は高いところに家があって車が入らないし、皆さん初盆に来てくださるから、申し訳ないと思って、ちょっと大きいところをお借りして、そこで初盆をしているという。だけどご院家さんはきっとうちに来ると言って、そのお孫さんが、かわいらしいお嬢ちゃんでしたが、お孫さんがお茶を入れてくれて、「ばあちゃんは偉かったんやぞ」と言ったら、「うん、偉かったと言うとった」と。親戚中で、あのばあちゃんが亡くなっただけで、やっぱりみんな力落として、火が消えたみたいになっているのです。「ばあちゃん偉かった」と言うから「どこが偉かったんや」と言ったら、「うーん」と言ってたけど、僕は言ったのです。「私はばあちゃんと長いこと付き合ってきた。何十年も付き合ってきたけれども、君のところのばあちゃんは人の悪口を一言も言ったことなかったぞ」。つまり、助けてもらったからやろうね。知らん人も来てくれて、カンテラつけてくれて、そして一番困っているときに縁のない人にまで助けてもらったんやね、きっと。それで絶対に悪口言わなかったね。「それだけでも偉かろう」と言ったら、「うん、そう、偉い」と孫さんが言うとった。「あれはなあ、仏教がようわかったばあちゃんやったんだ。人の悪口一言も言わなかったぞ。それだけでも偉いと思いませんか」と言ったら、「うん、偉いと思う」とお孫さんが言うとったわ。

だからばあちゃんは念仏者として生きて、念仏者として死んだのですが、それがみんなに影響を与えていて、おそらくお孫さんたちもまた仏教を聞くようになるぞ。一番上の息子さん、その時乳飲み子で手を引いていた息子さんが、今私のうちの責任役員をしてくださっている。その人もご門徒さんじゃない。たった一人のおばあちゃんだけど、そして田舎でそんなに褒められた脚光を浴びるような生き方をしたおばあちゃんじゃないけど、念仏に生きるということは、どれだけ周りに大きな影響を与えているかというふうに思いますよ。わかりますね、それが大事なのです。つまらんことで脚光を浴びたり、テレビに出たりしているのを見ると、何かこっちからするといいように思うけど、そんなのは何の実質もない。きちっと人として、人と人との間をちゃんと生きて、そしてばあちゃんが最後に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言って、「みんなにありがとう」と言って死んだそうです。「そうやろうな」と思った。僕は去年行ったときに、ばあちゃん寝たきりやったから、「ばあちゃん、どう」と言ったら、手を合わせて「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と念仏して、嬉しそうな顔して、「ボンちゃん、寝たきりでもどうもない。嫁がどれだけよくしてくれるか。ご飯作って持って来てくれるし、洗濯して持って来てくれるし、うちはずっと寝ているだけよ。そやけど、みんなよくしてくれるから、どんなにうれしいか」と言って、嬉しそうな顔をして南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言っていたのよ。そういう人生でしたよ。いいじゃないですか。ね、そういうふうにして周りの人に仏教の大切さを伝えとるのよ。まあ、そんなばあちゃんがおりました。

これよ、「頑魯のもの」、ここだけがどんな人とも生活を共にしていくという世界を開く、決して偉そうにしない。それが源信僧都の立脚地だったのだと親鸞聖人が言うのはわかるでしょう。親鸞聖人はたまたま法然上人と一緒に流罪に遭ってね、そして法然上人からやっぱり託されたのよ。今日、あとでまた申し上げますけども、『教行信証』を書くという仕事を託されたのです。だから自分は法然上人と出遇って、法然上人の仕事の責任を担うという役割があったから『教行信証』を書いて、そして坊さんとして生きたけども、できることなら私は加古川の教信沙弥のように生きたかったというのが、親鸞聖人がいつも言っていたお言葉なのですよ。

知ってますか、兵庫県に加古川というところがあるでしょう。あそこに教信という沙弥がおったのです。沙弥というのは坊さん崩れ、昔、坊さんだったのです。ところがもう坊さんも辞めてしまって加古川のほとりに住んでいて、掘っ建て小屋に住んでいて、そして加古川を渡る人を一生懸命かついて渡していた。家族も誰もいないで掘っ建て小屋の西の方だけに窓をつけて、そして西の方の浄土を拝みながら一生を終えた人。結局、教信沙弥は誰も弔う人がいなかったから犬が食ったというふうに伝えられているのです。『改邪鈔』（がいじゃしょう）を読むと、「私は実は教信沙弥のように生きたかったのだ」と（「つねの御持言には、「われはこれ賀古の教信沙弥の定なり」…教信沙弥のごとくなるべし…」東聖典６７９～６８０頁、西９２１、島２６－３）。ところが法然上人のご縁で『教行信証』を書くことになったけど、できたら教信沙弥のように生きて、教信沙弥のように死んでいきたかったのだと、いうふうに親鸞聖人がおっしゃるわけです。

わかりますね、私が申し上げたいことは。田舎で生きるということは、そんなに派手な生

き方ではないし、人から褒められるということは何もないかもしれない。それでも自分の人生を生きたのだと、自分の人生だったのだと言って、自分の人生に手を合わせて、「ありがたい」と言って死んでいける者、そして周りの人に「ありがたかった」と言っていける者、それこそ、そういう意味で本当の人間ですよね。そういう者を念仏が生むのだと。ここが源信僧都の立場なのですよというふうに見ている親鸞聖人は偉いでしょう。

まあ源信僧都、日本に二度と出ないだろうと言われてたくらいの天才です。源信と法然はね。ところが二人とも、どっちとも凡夫に帰った人。これがやっぱり偉い人やね。そんなふうに思います。後半法然上人を少しお話して、法然上人の課題、親鸞聖人が引き受けた課題を勉強していきましょう。ちょっと休憩します。（休憩）

講義 ２

それでは七祖の最後になりますが、法然上人のところになります。ところが法然上人の引文はたった一つだけなのです。『選択集』から。普通、私たちが論文を書くときには、自分が師事する先生の文章をたくさん引用しますけどね、親鸞聖人は『選択集』のたった一文だけしか引用していません。それもよく知っておいてください。聖典の１８９ページ（西１８５～１８６、島１２－３６～３７）になりますが、少しみなさんと一緒に読みましょう。

「『選択本願念仏集』源空集　に云わく、南無阿弥陀仏　往生の業は念仏を本とす、と。

また云わく、それ速やかに生死を離れんと欲（おも）**わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を閣**（さしお）**きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、正雑二行の中に、しばらくもろもろの雑行を抛**（なげう）**ちて、選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲わば、正助二業の中に、なお助業を傍**（かたわら）**にして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名**（みな）**を称するなり。称名は必ず生まるることを得**（う）**、仏の本願に依るがゆえに、と。已上」**

これだけなのですね。これは「総結三選の文」と言われる文章です。要するに『選択集』の一番最初は題号、「選択本願念仏集」、題号ですね。そしてそのあとに「往生の業は念仏を本とす」という題号の下に書かれている文章があって、ですから、そこまでは要するに題号ということになります。題号と総結三選の文と言われる文章が一文引用されます。字はこう書きます。「総結三選の文」。『選択集』全体をまとめて、そしてここには三つの選びがあります。

まず一つは「それ速やかに生死を離れんと欲わば」、ここ大事ですよ。いいですか。私たちの実際問題である生死の問題を離れたいというふうに思うならば、二種類の優れた法がある。聖道門と浄土門だけれども、その中で「聖道門を閣（さしお）きて、選びて浄土門に入れ」、浄土門の選び、これがまず一つ。それから浄土門に入ろうと思うならば、正行雑行二行の中で、「しばらくもろもろの雑行を抛（なげう）ちて、選びて正行に帰すべし」。念仏。

最初は聖道門と浄土門の選び。次は正行と雑行との選び。そして最後に正行を修めようと思えば、正業と助業と、助業（じょごう）というのは、先ほどみなさん勤行をしましたね、あ

れは助業です。南無阿弥陀仏、これが正業。それから、勤行をしたり、和讃をあげたりいろいろありますね。そういうのは助業になります。ですからここも正業の選びですが、「助業を傍らにせよ」と。こんなふうに三つの、聖道門と浄土門なら浄土門を選びなさい。正行と雑行なら正行を選びなさい。正行のためには助業を傍らにしなさい。というふうに三つの選びがある。ですから、『選択集』全体をまとめる総結の文章として、この三つの選びが表されている文章、総結三選の文と言われる文章、これが一文だけ『教行信証』では引用されます。いいですか、いいですね。

そうですね、『選択集』全体をまとめる文章ですから、まあ要するにこれは、最後に実はこのことが大事なのよ。「なお助業を傍（かたわら）にして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり」。称名念仏、これひとつを説いている。ところがこの称名念仏は比叡山の念仏とは違って、「称名は必ず浄土に生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに」。これが一番大事になりますね。皆さんはここで勉強なさっていますからおわかりになると思いますが、阿弥陀如来が本願をたてて、そしてどんな人間も必ず救うと言って阿弥陀如来の方から選んだ念仏、仏様が選んだ念仏、本願の念仏。もし本願がわからなければ、明恵のように聖道門の修行が大切か、念仏が大切か、とこういうふうになるわけよ。

行行相対といいますけどね。そうなると、どう考えても聖道門の念仏の方が立派に見える、やっぱり、聖道門の修行の方がね。ただ念仏する、念仏だけで救われる、そんな馬鹿なことがあるかという明恵の言い分の方が正しく見える。それは本願がわからないからです。だから称名念仏を絶対の行にするのは本願の信心、信心が念仏一つでいいと、念仏が絶対の行だということを決めるのであって、その信心がなくなると、どっちの行が立派かなという話になると、聖道門の行の方が立派に見える。そうですね。ですから「選択**本願**念仏集」、法然はちゃんと「選択**本願**念仏集」、そして「仏の**本願**に依るがゆえに」と。これが法然の最後の立脚地になります。ここが大事なところです。わかりますね。

皆さんはどう、ここはやはりお盆参りしますか、お寺さんが。お参りに来るのですね。ああそれは大変やね。大変なんだ（笑）。僕はもう村中、ご門徒さんはないけど爆発を受けた家はみんな参っていた、１２０軒ほど。けどもう、僕も行けんようになるし、代も代わってくると、「なんで、あそこの坊さん来るのか」と、わからんようになるから、高校野球ばかり見てお布施も包まないところもいっぱいあるから、それはどっちとも不健康やというので、アンケートで…、そんなことをアンケートしたら減るって言うから、減ってもいいと言って、最近行っているのは２０軒くらいです。面白いよ、僕が行くと、若いのがもう待ち構えているのよ、しゃべろうと思って。まあいろんな話をするのですが、僕はちょっと違う発想だから話をしていて面白いのでしょう。どういうこと、どういうこと、と聞くのです。こういうこと、こういうこと、と言う。なんで政治と宗教は結びつくのでしょうか。うんそれはそうかな、いつの時代でもそうだった。それはそうさ、だって政治を司って頂点に立つ人は、そこの民衆をどうやって治めていくかということになる。そうすると民衆は政治とか権力だけでは抑えられない。僕らはどうして生きている。政治とかプーチンのように国土を広くする、そんな興味は全然ないぞ、どうでもいいそんなことは。そんなことよりも平和に生きて今日

一日過ごせて「晩酌うまかったなあ」と言って、そしてなにか、ありがとうと言って死ねたらそれが一番いいわけです。ところがそういうふうにするためには、なかなか難しい。そんなふうになかなかならない。文句ばっかり言って、「お前のために俺はもうえらい損をした」と言って死んだ人がおるらしい。奥さんはそれでうつ病になっていました。そんなことを言って旦那が死んだらね。死ぬときは「ありがとう」と言って死になさい（笑）。ほんとほんと。それがなかなか出来ない。それを宗教というものが司っているから、だから仏教にしろ、いろんな宗教と政治家とが結びついて、そして日本の国を治めていく時には、仏教で治めていこうと、こういうふうになっていったのではないのと言ったら、「なるほど」と言って、そんな話から、うだうだ訳のわからんことを言って、もう言われません、それ以上は（笑）。面白い話をするのです、いろいろ。もう言われないけれども、最後くらいになると「ご院家さん…」、こんなこと言うとっていいのか、皆さん眠たそうな顔しているから。最後頃になると、「ご院家さん、俺はもう女いっぱい浮気してきたけど、やっぱり嫁さんが一番いいごたる」（笑）と。「それはお前、そう言わんと置いてもらえへんぞ」（笑）。「うん、けどね、この年になってもまだむくむく起きるし、あちこち行きたくなる」。「それはそうかもしれんな」。二つ考え方がある。一つは、例えば、女性だというのだったら、白人もおれば黒人もおる、そんなことを言っていたら世界中まわらなくてはならない（笑）。広く見ていくという見方が一つはある。もう一つは自分の足元を深く掘り下げるという考え方がある。それは朝ドラで言っていたでしょう。「フォンターナ」と言って（笑）。「フォンターナ」というのはニーチェの言葉です。あれは自分の足元を深く掘り下げると、そこに泉があるということです。だから「フォンターナ」とつけたと言うとったろう。「そうそう」。広く浅く何でもわからないといけないというのが世間の常識ですから、学問でいうとそういう勉強をしているのは東大です。けど自分の足元を深く掘り下げて普遍的なところまで届こうとする考え方がある。それはお釈迦さんもそうだし、仏教もそうです。それから、日本の学問で言えば京大がそうです。だから京大しかノーベル賞は出ない。東大というのは広く浅く知っているのです。何でも知っているのです。そのかわり何もわかっていない（笑）。「それなら女のことでも足元を深く掘り下げると、どこにも行かんでもいいのですか」。と言うから「そうや、行かんでもいい、お釈迦様は行かんでもわかっていた。善導大師も戒律を守っていて、女性を見るときには目を下げて見なかったと言っていた。「なんでわかるんですか」と言うから「よく考えてみなさい、お前、女はどこがいいとか、ここがいいとか、何とかしたいとか、どうしたいとかいう、お前自身の根性がどういうものかということがわかったら、うろうろせんでもよくなる」。「なるほど、今日はいいお説教を聞かせてもらいました」と（笑）。そんなことばかり言っているのです。確かにそうだ、まちがいなかろう。広く浅く何でもわかろうとすると、お釈迦様は世界中のことをわかっていたというのだけれど、インドから一歩の出ていない。それは世界中のことに迷っていく自分の根性が全部わかった。女性に迷う根性もわかった。それがわかると、今度はじっとしていても、もう女性のことはわかったと言ってもいいかもしれない。そういうものなのだと言ったら「なるほど」と言って、「今日はご院家さんお布施がちょっと少ないようだ」（笑）と言った。「あんたが酒を飲むのなら毎日来てもいいけどな」、酒を飲まないのです、あの人は。「毎日来てもこんな話ばかりするぞ」

と言ったら、「いやあ、女の話で仏教に着地するとは思いませんでした」（笑）と言った。そんなことばっかり言っている。まあ楽しいことですよ。

わかるでしょう、言っていることは。深く掘り下げて本願の泉にまで到達した。その時に、今言った人間のいろんなところに迷っていく、迷っている根性のありさまがよくわかった。だからもう迷わない。だから本願に到達すること、それがお釈迦様の本願の教えです。だから法然も本願の念仏、本願の念仏に依るのだ。本願によって念仏は絶対の行になるのであって、本願がなければ行行相対的に考えるしかなくなってくる。そうなると苦労している方が立派だねという話しになるから、そうじゃないんだということを、この総結三選の文が明らかにしてくださっている。これでわかりますね。ですから、はっきり言うと本願の念仏、称名念仏一つでいいのだと言ったのが法然上人だから、この文章一つを引用している。ここまでいいですね。

ところがそれを受けて、いいですか、大切なのは次の文章です。これは法然上人の文章を受けた御自釈です。御自釈というのはわかるね、親鸞聖人が筆をとってお書きになった文章ですから、親鸞聖人の文章です。ここを読みますよ（東聖典１８９頁）。

「明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行にあらず。かるがゆえに不回向の行と名づくるなり。大小の聖人・重軽の悪人、みな同じく斉しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし。」

いいですね、これが法然上人の選択本願の念仏を受けて親鸞聖人がお書きになった御自釈になります。わかるように言うと、「これで明らかに知ることができたでしょう。法然上人がおしゃっている選択本願の念仏は凡夫、聖人の自力の行ではないのです。だから不回向の行と言うのです。その不回向の行によって、大小の聖人、優れた聖人も普通ぐらいの聖人も、あるいは重軽の悪人、重い罪を持った、軽い罪を持った悪人は同じように斉しく選択大宝海に帰して、一乗の海、大宝海というのは一乗海、涅槃界、仏様の覚りに帰して、念仏して必ず仏になるのです」。こういう御自釈をつけられます。

これから御自釈に移りますよ。ここ大事なの。確かに法然上人は選択本願の念仏、これ一つでいい、その通りですと。なぜかというと、これは法然上人が言って知ることができるでしょうと。自力の行ではない、だから人間の方から回向しない。不回向の行である。この行によって本願の方から、一乗海、大宝海が開らかれて、それによって必ず仏になるのです。こういう意味なのです。これは、不回向の行というのは、自力の行ではない。だから人間の方から回向しない。けれども本願の方から開かれた覚りによって念仏成仏するのです。こういう意味ですね。これは『観経』、『観経』は私が何度も言いますように本願が説かれていませんね。そして自力では救われないということを教える経典でしたね。だから『観経』に立った法然上人の念仏は不回向の行である。こういうふうにしか言えないのだというのが親鸞聖人の見解です。人間の方からの行ではない。人間の方から回向しないのだと。

ところがこれは本願に帰依した人なら、まあわかります。ところが本願がわからない、例えば明恵という人の常識からすると、あるいは世間の常識からすると、人間の行ではない、人間から回向しない。ほんならなんで助かるのやと。必ずこういう疑問が出て来る。そう思いませんか。不回向の行だけならね。つまり不回向の行、これは『観経』では本願力回向の行と言えないの。本願がないから。そうですね。そうでしょう。親鸞聖人というのは、もの

すごく厳格な学者だから、『観経』には本願が説かれてないから、本願力回向の行なんて言えないのです。だから自力無効しかないから、自力じゃないよというところまでしか言えない。だから親鸞聖人は法然の念仏は不回向の行。ここまでしか言えないのです。これが親鸞聖人のご見解です。当然ですね、そうですね。自力無効を教えるのだし、自力では救われないよということを教えるのだから、人間の方から回向しないよ。そういう行なのですよ。法然上人の場合にはここまでしか言えないのですと。これが親鸞聖人のご見解です。当然ですね。実際に法然上人の『選択集』を読むと、回向するのかしないのか、「**回向不回向対**」というところがある（『真宗聖教全書一　三経七祖部』９３６～９３７頁、西『浄土真宗聖典七祖篇』１１９６～１１９７頁）。ところが法然上人は本願には一切言及していない。念仏についてはね。先に自分の信念としては「仏の本願に依るがゆえに」という信念が最後にはあるけれども、それを『観経』の教学として表向きには言えないから、だから法然上人は本願力回向とは言わないのです。従って、『観経』に立った法然上人の場合には、不回向の行、ここまでしか言えませんよと、これが親鸞聖人のご見解です。そうですよね、問題ないですねここは。

ところが不回向の行では、人間の力ではありません。そうなると、それは神がかりかという話になる。それでは、なんで救われるのかという疑問が出るに決まっている。だから、法然の与えた課題は、こういう疑問が出ないように、答えから先に言います。『大経』によって本願力回向の念仏、あるいは本願成就の念仏、これを『大経』によって明確にしてほしい、こういう課題が親鸞聖人に残されているわけです。わかりますね。『観経』による法然では十分に言い切れていない。十分に理由がわからない。それを『大経』の本願によって、本願力回向と言えば、それは阿弥陀の本願に救われるのですよ。神がかりではありませんよ。はっきりしている。わかろうがわかるまいが道理としてはっきりしている。わかるかわからないかは、そっちの問題ですが、わかってもわからなくても一応本願によって救われるのですよということははっきりしていく。だから道理として本願力回向ということを明らかにしてほしいと、これが、法然が親鸞に残した課題です。ここで親鸞はそう言っている。

なぜかと言いますと、２３２ページを開けてみてください（西２４１、島１２－７５）。これは先ほど申し上げた三一問答の欲生釈と言われるところです。後でまた説明します。今は２３２ページの御自釈のところ、

「**次に「欲生」と言うは、すなわちこれ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。**」いいですね、そして、「**すなわち真実の信楽をもって欲生の体とするなり。**」その次、ちょっと印を付けてください。ここに、「**誠にこれ、大小・凡聖・定散・自力の回向にあらず。かるがゆえに「不回向」と名づくるなり。**」

さっきと同じ文章です。そうすると、この法然からいただいた不回向の行では、仏教の道理として完成されていない。だから至心・信楽・欲生の欲生釈のところにこれと同じ文章が出てくるということは、この欲生釈のところで、本願力回向ということを明らかにしていくことになります。その次をちょっと読んでみます。

「「不回向」と名づくるなり」。そのあと、「**しかるに微塵界の有情、煩悩海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし。このゆえに如来、一切苦悩の群生海**

を矜哀して、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念一刹那も、回向心を首として、大悲心を成就することを得たまえるがゆえに。利他真実の欲生心をもって諸有海に回施したまえり。欲生はすなわちこれ回向心なり。これすなわち大悲心なるがゆえに、疑蓋雑わることなし。ここをもって本願の欲生心成就の文、」と、こういうふうにいいます。

そうすると欲生と、至心信楽欲生という欲生は、実は回向心である。如来の回向心である。こういう結論をつけているわけです。それで、ここは三一問答を少しお話ししなくてはいけませんが、信の巻に行ったときに詳しく話すけれども、ここは大雑把にしゃべります。まず第十八願、当たり前のことですが、誰でもわかるようにちゃんと言っておきます。１８ページ（西１８、島１－１６）、ここに第十八願がありますね。当たり前ですが「**たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信楽して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。**」

至心、信楽、欲生と、この三つの心によって称名念仏しなさい。そういうことですね。これが如来のもともとの本願に誓われている言葉。至心、信楽、欲生、この三つの心によって念仏しなさい。もし念仏して仏にならなかったら私も仏になりませんと、こう誓っている。ですからこれは如来の心。そうですね、至心、信楽、欲生、この三つの本願の心によって、これは如来の願心です。本願の心という意味で如来の願心です。この三つの心によって念仏しなさいと、こう誓っているのが因願の方ですね。ところが、この直接の三一問答の問いは、至心、信楽、欲生の心によって称名念仏しますと答えるのはいいけれども、そうじゃなくて、例えば世親は「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来」と、こう答えている。至心、信楽、欲生と誓っているのに、なんで一心というのか。これが三一問答の最初の問いです。いいですね。わかる人はわかっとるな（笑）。わからない人は何がわからないか聞いてくれたらいいのやけど、本願の心は至心、信楽、欲生の願心によって念仏しなさいと言っているが、ところが世親は「一心」という信心によって自分は念仏しますと答えている。願心には三つあるのに、なんで世親は一心と言うのか、これが三一問答の最初の問いです。

だから、これは三一問答に行ったときにもう一回言うよ。けど今ちょっと言っておかないとしょうがない。それはここです。一番最初の問い、２２３ページ（西２２９、島１２－６６）、そこに印をつけておきなさい。まず問いを起こします。いいですか。

「**問う。如来の本願、すでに至心・信楽・欲生の誓いを発したまえり。**」そうですね。

「**何をもってのゆえに論主「一心」と言うや。答う。愚鈍の衆生、解了易からしめんがために、弥陀如来、三心を発したまうといえども、涅槃の真因はただ信心をもってす。このゆえに論主、三を合して一と為**（せ）**るか。**」

これが一応の答えです。確かに如来の本願は至心・信楽・欲生の心を持ちなさいと言ったけれども、世親は一心と言った。なぜかというと、この一心こそ実は涅槃の覚りを開くからだと、さっき言った自分の足元をずっと掘り下げて、そして本願にまで突き抜けたときに、本願の世界、涅槃の覚りの世界、仏様の世界を開くから、だから凡夫でも修行をしなくても仏様の覚りがわかるように一心の信心なのだと世親が教えてくださったのです。こういう意味です。

そこから三一問答が始まりますが、今日は質問の時間が短くなるかもしれませんが、せっかく言いかけたので、親鸞聖人はこれを二つに分けます。至心信楽と欲生に分けます。そし

て、みなさんよくご存じの、例えば本願の成就文、覚えているね、「**あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん**」で、○（丸）。ここまで。そして「**心を至し回向したまえり。**」（東聖典４４頁、西４１、島１－３９）これが始まる。だから本願成就文も今言ったように、これを二つに分けて、「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん」。この至心信楽というこの二つが信心の成就、信心を表す。そして「心を至し回向したまえり」。この欲生心の方を回向というふうに充てる。わかりますね。学問で言えばそういうことなのですが、学問で言わなくてもわかるでしょう。例えば、聞法してどうにもならんようになって、ああお手あげやと。もう自力では救われないと、南無阿弥陀仏と頭が下がった。「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん」。頭が下がった、南無阿弥陀仏。そうですね。その信心は、実は如来の方から回向してくださった信心だから、「**心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す**」。如来の方から回向してくださった信心だから浄土に生まれたいと思えば、その信心にはすぐ、如来の方からの回向だから如来の世界が開かれて、そして「即得往生」、すぐに往生するということが実現するのですよというふうに、本願成就文を二つに切って了解しました。前半が信心の成就。後半が欲生心の成就。それを、実は、三一問答のところで明確に示しています。同じことを、今私が申し上げたことを。

さっきのところをもう一度開けてください。２３２ページです。ここは欲生というところの註釈ですから、それまでに至心信楽があったわけです。至心信楽のところをちょっと見てみましょう。２２５ページ（西２３１、島１２－６８）、ここから仏意釈というのが始まるのですが、「**仏意測り難し**」、何で至心・信楽・欲生と、三つの心で如来が誓ってくださったのか、その仏意は凡夫にはわからない。だから、仏意は測り難い。「**しかりといえども竊**（ひそ）**かにこの心を推するに**」、この心というのは他力の信心のことです。だけども凡夫であっても竊かに、この信心を推しはかっていくと、

「**一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもって如来、**」

わかりますね、自分の他力の信心をさっき言った「フォンターナ」ではないけれども、ずっと掘り下げていくと自分の在り方の方が先にわかる。どんな根性かというと穢悪汚染。いつも邪（よこしま）で悪いことばかりに向く、清浄の心なんてどこにもない人間には。それから、嘘・虚仮諂偽、うそ・へつらい、そんな心ばかりで、人間の中に真実の心なんかない。だから如来が「**一切苦悩の衆生海を悲愍して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもって、円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまえり。**」至徳というのは名号と考えてください。永遠の苦労の中で如来の覚りがすべて含まれた、そういう不可説の名号を成就してくださった「**如来の至心をもって、諸有の一切煩悩・悪業・邪智の群生海に回施したまえり。すなわちこれ利他の真心を彰**（あらわ）**す。かるがゆえに、疑蓋雑わることなし。この至心はすなわちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。**」

南無阿弥陀仏の一番のもとになっているのは如来の至心、真実心である。要するにそういうことです。なぜかというと、私たちを救おうとして如来は苦労をしたのです。ところが仏

法を聞いても、すぐに自分の分別で勝手な了解をする。自分の都合がいいように考えて、そしてそれで辻褄合わせようとする。しかも生活はというと、さっき言ったように、僕は彼が言うのは正しいと思う、若い時はそういうことはあるわ。そういうことばかりしか考えていない。そんな者をどれだけ救おうとしても無理と思ったの。だから、私は自分の真実心をもって、あなたにあげると。それが如来の至心です。こう説いている。

それから信楽も一緒です。信楽釈２２７～２２８ページ（西１０６～１０７、島１２－７０～７１）、ここも読んでみようね。

「**次に「信楽」というは、すなわちこれ如来の満足大悲・円融無碍の信心海なり。**」信楽というのは、これは仏様の心だから、「円融無碍の信心海」、海のような覚りの世界である。「**このゆえに疑蓋間雑あることなし**」、疑いや迷いや自力、それは全然無い。「**かるがゆえに「信楽」と名づく**」。仏様の信楽なんだと。これは「**すなわち利他回向の至心をもって、信楽の体とするなり。しかるに無始より已来**（このかた）**、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信楽なし。法爾として真実の信楽なし。ここをもって無上功徳、値遇しがたく、最勝の浄信、獲得しがたし。一切凡小、一切時の中に、貪愛の心常によく善心を汚し、瞋憎の心常によく法財を焼く。急作急修して頭燃を灸うがごとくすれども、すべて「雑毒・雑修の善」と名づく。また「虚仮・諂偽の行」と名づく。「真実の業」と名づけざるなり。**」わかりますね。

真実心がないのと同じように、人間にいくら信じろと言っても無理。仏様を信じる心なんてどこにもない。つまらないことばかりを信じる。金や名誉や地位やそんなことばかりを信じる。だから、そんな心で浄土に生まれようとしても、「**この虚仮・雑毒の善をもって、無量光明土に生まれんと欲する、これ必ず不可なり**」。無理。だから助けようがない。いいね。だからこの至心・信楽のところで、もう人間は助からないということを宣言している、仏さんの方が。助けようがないと。

ところが、ここから「**何をもってのゆえに**」、何をもって、どうして助からないかと言うと、ここは難しいのです。どうして助からないかというと、

「**正しく如来、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念・一刹那も疑蓋雑わることなきに由ってなり。**」どうして助からなかというと、仏様の方が真実の信心を完成させてくださったからである。「**この心はすなわち如来の大悲心なるがゆえに、必ず報土の正定の因と成る。如来、苦悩の群生海を悲憐して、無碍広大の浄信をもって諸有海に回施したまえり。これを「利他真実の信心」と名づく**」。そして至心信楽までを「**本願信心の願成就の文**」と名づく。こう言ってる。難しいでしょう。２２７ページから２２８ページにかけてのところ、難しいでしょう。僕の言葉でわかりやすく言い換えます。いいですか。

「仏法を聞いて聞法をして、私たちは助かりたいと思う。そのために聞法をしている。けどその根性も欲です。自分をいい者にしたい、人より目立ちたい、優等生になりたい、こういう根性がはたらいている。だから仏法を求める根性さえ真実ではないのです」。こういうことです。「だから、もう衆生には期待しません」。仏様はそう言っているのです。「もうあなたたちには期待しません。もうあなたたちは無理。だから私が信心になります」。こう言って兆載永劫の間修行して、仏様が他力の信心にまでなった。いいね、だから他力の信心と

いうのは自分の心ではない。仏様の心になります。

『大経』には勝行段というところがあって、法蔵菩薩の修行が説かれているのですが、そこは短いところで、今のように、信心にまで私がなりますというところまでは説かれていない。それは『論註』に説かれています。だから『浄土論註』の曇鸞という人はどれだけ偉かったか、自分には、人間には信心なんてありえない。ところが今救われている、他力の信心に救われたのだから、この他力の信心は私の心ではありませんと。仏様が身を捨てて兆載永劫の間修行して、そして私が信心になると言って、信心にまでなってくださった心、それが至心信楽なのだと。だからどこまでもこれは仏様の心なのだと。こういうこと。

『論註』は難しくて後半、私ははっきり言って大学の博士論文を書いたときには、そこまでよくわからなかったのです。ところが、僕は『論註』を十年くらい小樽で講義をした（延塚知道著『講讃浄土論註』全６巻、小樽浄土論註学習会　文栄堂刊）。その時に法蔵菩薩の修行がずっと説かれているのです。長いこと説かれているのです。これはいったい何なんやろうと思って、講義をしている間、何なんやろう、何なんやろうと思いながら講義しとって、やっとわかった。「そうか」と。「もう、あんなたちには期待できないから、私は期待しない」と。「私が信心になると言うたんや」と。だから至心・信楽・欲生というこの心が最後には「**妙楽勝真心**」という信心になっていくんだ。この信心こそ他力の信心なんですと曇鸞が説いているわけです（『真宗聖教全書一　三経七祖部』３４２～３４３頁、西『浄土真宗聖典七祖篇』１４９頁）。僕は小樽で『論註』を講義しながら、それに気が付いて、私は泣き崩れたよ。その場所に座り込んで泣き出して。すまなかったと思いまして、「何か、自分に信心が起こるくらいに思うとった。自分が救われるぐらいに思うとったんよ。お前たちなんか期待しない。だから私は身を捨てて兆載永劫修行したんだと。最後には、他力の信心にまでなりました。それが至心信楽という心なのだと。曇鸞がちゃんと書いているのです。まあ、感動しました。「あ、そうや」と。そして他力の信心にまでなっても、それはなったというだけだから、それを手渡さないといけない。手渡すというところに、我が国に生まれんと欲（おも）え。この我が国に生れんと欲えという、この欲生心こそが、実は他力の信心を手渡す心なのだと。さっきのところ、もう一度読みます。２３２ページ（西２４１、島１２－７５）。

至心信楽が本願信心の成就でしたね。今度は欲生に入ります。

「**次に「欲生」と言うは、すなわちこれ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。**」
如来が我が国に帰れという勅命である。命令であると。

「**すなわち真実の信楽をもって欲生の体とするなり。**」その真実の信楽を私たちに手渡したい。欲生の体というのは、欲生心の本体は信心のことだと。

「**誠にこれ**」、ここです、ここに法然の言葉が出て来ます。さっきの言葉ですね。「**誠にこれ、大小・凡聖・定散・自力の回向にあらず。かるがゆえに「不回向」と名づくるなり。**」
法然はここまでしか言いませんでした。『観経』はここまでしか言えません。しかし『大経』は違います。

「**しかるに微塵界の有情、煩悩海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし。このゆえに如来、一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念一刹那も、回向心を首として、大悲心を成就することを得たまえるが**

ゆえに。利他真実の欲生心をもって諸有海に回施したまえり。」
この辺は印を付けてください。「利他真実」、仏様の真実の欲生心に依って、我々に与えてくださっている。真実の信心を与えてくださっている。
「**欲生はすなわちこれ回向心なり**」。ここも印を付けてください。この欲生心こそ回向心である。「**これすなわち大悲心なるがゆえに、疑蓋雑わることなし。ここをもって本願の欲生心成就の文**」と、こう言うのですと。これだけです。
　ですからもう時間がないので整理をします。法然は不回向の行というところまでしか言えませんでした。その同じ文章を三一問答の欲生心釈のところに持って来ている。ここしかありません。ほかにはありません。だから、この欲生心は法然が不回向の行としか言えなかったけれども、それを『大経』によって実は「本願力回向なのだ」ということを言うときの一番の基礎になるのがこの欲生釈です。だから至心信楽は、これは法蔵菩薩が、「私が他力の信心になる」と言ってなってくださった。その信心を私たちに「回向したまえり」。与えてくださったのが、この欲生心である。だから全部他力の信心と他力の本願力回向、それによって救われ難い衆生を救うと言っているのが『大経』の法蔵菩薩のご苦労なのですと。こういうことを言っていることになります。どうですか、少しはわかるかね。
　仏法を聞き始めて他力の信心を得たような気になることもある。だから信心は自分が起こすのだと思うて、ずっと私はやってきましたが、『大経』を読むと、「もう、お前たちには真実心なんかない」と。その通りや。金や地位や名誉や女や男や、そんなことしか考えていない。そんな者が救われるわけがないと。だからお前たちなんか、もう相手にしておれないから、私が信心になるよと言って、至心信楽という心が他力の信心になってくださった。この信心は欲生心というところで回向してくださった。この至心・信楽・欲生、これが本願成就文では「本願信心の成就」、「本願欲生心の成就」、こう言うのだと。これが親鸞聖人の法然上人から与えられた課題でした。だから、本願力回向ということをこんなふうに道理として明確に示していること、これが師の法然から与えられた課題だったということがよくわかります。わかりますね。
　まあ、ちなみにですけども、法然上人は回向と言っていないでしょう。だから多分議論したのですよ、法然と。お師匠様は『観経』に立っておられるから、「本願力回向ということはおっしゃいませんでしたね」と。けども凡夫がどうして救われるかということになれば、本願力回向ということをどうしても明らかにしなければ疑問が出てきます。言ったに違いないのです。そうしたら、法然は偉かったのよ。「あなたがおっしゃる通り、『観経』では本願力が説かれていないから、本願力という言葉は使いませんでしたが、「義なきを義とす」と言ったでしょうと。わかりますか、「義なきを義とす」。凡夫が救われるはたらきは、私たちの理論を超えている。「義なきを義とす」と。法然上人の説法の最後は「義なきを義とす」。義を建てるな。誓願不思議によって救われるのだから、人間の理論で救われるのではない。だから義を建てるな。「無義為義」と法然上人は答えました。なぜかと言いますと、親鸞聖人の晩年の回向論を見ると、往相回向にも還相回向にも、なぜか突然、無義為義が出てきます。法然の言葉がね。なぜ回向のところに無義為義が出て来るか。これも誰もわかっていませんが法然がそう言ったのです。私は回向とは言わなかったけども無義為義と言ったでしょ

うと。人間の理屈では救われんと。本願力に目覚めないと救われないんだと言ったでしょうと。だから「義なきを義とす」（無義為義）と言ってきましたと法然が答えたのです。

勉強してごらん面白いよ、透けて見えるから。４７０ページ終わりから４行目、ここまでずっと阿弥陀如来の往相回向の本願について語ってきました。ですから４行目から読みますと「**この阿弥陀如来の往相回向の選択本願を、みたてまつるなり。これを難思議往生ともうす。これをこころえて、他力には義なきを義とすとしるべし**」（『三経往生文類』、西６２９、島１６－３）。ここですね。いきなり「義なきを義とすとしるべし」と出てくるでしょう。法然上人に「回向とは何ですか」と聞いたら、「義なきを義とす」ということですと答えたからです。往相回向にも出て来ますし、晩年の回向論、還相回向のところにも、「義なきを義とす」と出て来ます。

せっかくですから、４７７ページ、終わりから四行目。ここは還相回向です。

「**これは如来の還相回向の御ちかいなり。これは他力の還相の回向なれば、自利・利他ともに行者の願楽にあらず。法蔵菩薩の誓願なり。「他力には義なきをもって義とす」と、大師聖人はおおせごとありき。よくよくこの選択悲願をこころえたまうべし。**」（『如来二種回向文』、西７２３頁）。ここにもいきなり「他力には義なきを義とす」と出て来るでしょう。これは完全に法然の言葉ですからね。ですから法然は往相回向にも、還相回向にも「義なきを義とす」と言ったでしょうと。それがあなたの『大経』による誓願不思議、本願力回向ということです。と言って答えたはずです。

いやあ、僕はいたく感激しているのですが、皆さんの方はいたくしらっとしてますので（笑）、まあ、こういうことは少しずつ勉強していくと少しずつわかってきます。今、行の巻で初めて不回向の行から本願力回向に転換したのが親鸞です。そして、それは法然の課題をわかるように、本願の道理を踏まえて本願力回向という形で答えた。それが親鸞の仕事だったということがさっきの引用の仕方からわかります。引用の仕方、御自釈の仕方からわかると思います。そこまでわかっていただければ、行の巻はそれでいいと思います。また、信の巻に行ったときに少しずつお話をして、たぶん『教行信証』を終わるころには、感動するか死んでるか、どっちかです（笑）。

ちょっと時間がオーバーしてしまいました。けれどもせっかく親鸞聖人の課題を言い始めたので、そこで法然からどういう課題を引き継いだのか、よくわかるでしょう。本願力回向という課題を引き継いだ。そういうことがわかっていただければ大変ありがたい。質問ですが、えっと、岡田先生何かさっき言っとったね。「いえ、もう結構でございます（笑）。私もいたく感動しております」。ああそうですか、それはありがたいことです。感動を共にできるこんな嬉しいことはありません。法然から受け継いだ課題、それが行の巻ではっきりわかれば、ある意味で十分かなと思います。もう一つあるのですが、それは次の時に言って、そしてまとめの御自釈、そこを勉強して、そこまでいけばもう行の巻はほぼ終わったようなものです。そこまで行きたいと思います。今日のところで何か質問ありますか。もうちょっと時間ありますよ。

質疑応答

質問者１・・質問というか感想なのですが、今日の至心・信楽・欲生のところを『教行信証』で一緒に読ませていただいて、『正像末和讃』の「**如来の作願をたずぬれば　苦悩の有情をすてずして　回向を首としたまいて　大悲心をば成就せり**」（東聖典５０３頁、西６０６、島１１－３５）という、あれが、あっ、このことだったんだなと思って、ものすごく感動しました。ありがとうございました。

先生・・その通りです。本願の方のお仕事なのです。信心の発起は私たちの仕事です。ところが信心の発起ということまで言わなくても、自力無効ということが私たちの仕事。聞法するときに自力では助からない。どうにもならない、お手上げだ。その時に、本願力回向の信心に目覚めていくチャンスです。お手上げだということだけだったら、私が時々申し上げますように、大病したり、この世ではもう助からんという目にあうと、ああ自力無効やということはわかります。ところがそれをもう一歩踏み超えて、そういうことをそもそも知らせてくださったのは如来の智慧です。自力で自力無効がわかるわけがない。そうですね。だから自力で救われないということがわかったというだけで、それは如来の智慧がはたらいているからです。そうですね。そこに如来が至心信楽と誓って、そして自力では救われないよということを教えて、この本願力回向の信心に目覚めさないと、こう言って身を捨ててくださったということをよく勉強しておいてください。よく知っておいてください。それを知らないと自力無効だけで終わります。そして、それだけで仏教がわかったような顔をしだす。そうではなくて、自力無効を通して本願力の信心にまでなってくださった。だからこんな大きな世界が開かれた。それは信心のおかげなんだ。法蔵菩薩のご苦労なんだというふうに、昔のじいちゃん、ばあちゃんたちはみんな、「法蔵菩薩のご苦労です」と、「あんな苦労に比べたら、私の人生の苦労なんて何のこともありません」と、こう言っていました。そこに大切な意味があるということを何とかわかってください。そしてそれを手渡してくださる欲生心だと。だからすべて絶対他力のはたらきで、この凡夫がこのままで仏様の世界の中にあるということを知らしていただくのだと、いうことが親鸞聖人の最後の結着点になります。そこにまあ絶対他力と言ってもいいような、こちらから一切手出しをしなくていい世界があるということを知っていただければありがたいというふうに思います。

質問者２・・先生一ついいですか。みなさん感動している中で、ちょっとしらける質問なのですが、先生からこの前教わって、１８、１９、２０願には、一切衆生の他に欲生我国という共通する言葉あるというふうに教わって、あ、そうかと思ったのですが、今回の至心釈、信楽釈、欲生釈に「**疑蓋雑わることなし**」と三つともあるのですよ。一回私の家でやっていた宇佐聞法会の７、８回目頃に私が「これはどういう意味ですか」とサブテーマにして、先生の講義をしていただいたのですが、その時、私が思っていた意味と全然違っていて、先生もなんでそんな馬鹿なことを聞くのかというような顔をして、正直に言うと、あんまりわか

らなかったのですが、なんか共通して、「かるがゆえに」とか「なるがゆえに」とか、前の言葉の意味がわからないものだから、なぜこの言葉が出て来るのか。

先生・・まあ本格的には、信の巻を勉強するときにお話をしますが、今、わかることから言うと、至心・信楽・欲生、そして信心の成就というと、この至心信楽が私たちの信心になる。こう思うわけです。そう思うね。そしてそう考えるわけです。そう考えた信心と「無義為義」、考えが及ばなくなって、本当に仏様に救われた信心とは百年違います。だから、言葉の意味から、上から言うと、至心・信楽・欲生というのは、これはすべて仏様の本願の心だから、全部「疑蓋雑わることなし」です。それに反対して私たちの心は全部「虚仮諂偽」、救われない心ですよとこう言っているだけの話しであって、仏様の心に疑蓋は雑わらないから、至心・信楽・欲生、これ全部「疑蓋雑わることなし」。その仏様の心が、私たちの信心になるのだと、こう考えてしまうから、私たちの信心も「疑蓋雑わることなし」だとこう思うのです。それは考えるのは勝手だけど、それは考えだから、それではなかなか救われないかもしれません。ということです。

質問者２・・要するに、仏様の心だから「疑蓋雑わることなし」ということですか。

先生・・そうです。**そ**ういうことです。だから、こちらから言うと、仏様の心に、疑蓋雑わることなき心に頭を下げてる。だから「**この信を崇**（あが）**めよ**」（「総序」）と親鸞聖人は言っている。自分の信心に自分が頭を下げている。自分よりも信心の方が自分を超えているから、仏様の本願だから、だから「この信を崇めよ」と言って、信心に自分が頭を下げている。そういうことは、普通頭で考えてもわからないけれども、この間言ったように小松のばあさんじゃないけど、本願を説明したらいけない。本願が体でわかった時に、ちゃんと親鸞聖人が言っていることが正しいということがわかる。これは言葉の上から言えば願心だから「疑蓋雑わることなし」です。信心は、私たちの信心ではない、願心だから。そういうことになります。

質問者３・・「他力には義なきをもって義とす」というお言葉の証明は、法然上人が、親鸞聖人にとっては、法然上人のご存在が証明であったのではないかと感じるのですが、それでよろしいですか。

先生・・その通りですね。それでいいです。つまり、今日のところで、普通は、「行信」を明らかにするというところに、法然のところには「行証」を明らかにすると書いてある。これはとんでもないことで、証ということは仏様の覚りを生きた人だと言っているわけです。法然はね。だから法然は証がなければ仏教にはならないのだと、だから証が無いものは仏教ではないと言って、証を、行信に証が直結する証は、これは浄土教しかないのだと。つまり証は普通だったら修行しないといけない。だから長い間かかって、証があるかないかみたいなことを言っているのが聖道門だけども、頭を下げて本願に帰依したときに本願の方から証

がこっちに来るのだと、だから証を生きていた。だから法然は覚りそのものを生きていた人として、みんなが「三昧法徳の人」と尊敬した。そんなふうに先生がおっしゃるように法然は、やっぱり飛びぬけた証を生きてたということがあったから、だから法然が「義なきを義とす」ということを生きたのだと言われたら、その通りだと思います。

質問者３・・法然様だけではなく、信心の方というのは、みなそのような方のように感じるのですが、それは。

先生・・それは先生がお感じになることです（笑）。私もそういうふうに感じます。

質問者３・・それは原理として成り立つというふうには言えないのですか。

先生・・言わない方がいいでしょう。なんで原理がいるのですか。

質問者３・・いや、深い真理性を感じるものですから。

先生・・　それはそうかもしれませんが、私も先生と同じように、自分の先生が二人おりますし、高史明さんなんかもそうですけども、みんな証を生きた人だと思います。そういう意味では世間の常識を超えていました。なんかびっくりするような、時々「えっ」と思うことを平気で言っていましたね。そういうところに仏教を生きた人の功徳が、はたらきがあるのかもしれません。

それでは今日はこれでいいですか。いやいや、暑い中ありがとうございました。

南無阿弥陀仏

田畑先生・・今日はこれで終わらせていただきます。恩徳讃をいただきます。

（恩徳讃、終了）